

## 10月16日（月）その83 東京大学入学式での祝辞

先週校外研修で、県立沖縄盲学校を訪問しました。濱元教頭先生に、沖縄盲学校の歴史や現状などをご説明いただくとともに施設を案内していただき、特別支援教育への理解を深めることができました。誠にありがとうございました。濱元教頭が、東大の福島さんの話をしたのを覚えていますか？

以下の文は平成19年・2007年の東京大学の入学式で、福島智教授が述べた祝辞のごく一部を抜粋しました。皆さんに聞いてほしいと思います。

皆さん、東京大学入学おめでとうございます。ひとことお祝いのご挨拶を申し上げます。（中略）少し私自身の体験をお話させていただきます。私は1962年の生まれで、現在44才です。私は生まれてから9才までは、目が見えて、耳が聞こえる普通の子供でした。私が小学一年生だった1969年7月20日、有名なアポロ11号の月面着陸という人類の歴史に残る出来事がありました。あのときのテレビ中継のインパクト、そして新聞に掲載されたページいっぱいに広がるような、あの写真の大きさを今も忘れることができません。（中略）父に天体望遠鏡を買ってもらった約束をしたのは小学校3年生の二学期でした。

しかし、まもなく私は失明してしまい、二度と星の光を見られなくなりました。その後はもっぱら音の世界に生きてきました。目は見えませんが、耳から入る情報もたくさんありますから、宇宙に関するテレビやラジオの番組を聴いたり、録音された本や点字の本なども読みました。ところが、その年の暮れ、今度は耳が聞こえなくなり始めて、ほぼ3か月の間に、全く見えない、全く聞こえない全盲ろう者の状態になってしまいました。

見えなくて、同時に聞こえないということは、主観的には自分がこの地上から消えてしまっていて、まるで地球の夜の側の、真っ暗な宇宙空間に連れて行かれたような感覚に襲われる状態でした。何も見えず、何も聞こえない、いつまでも続く静かな夜の世界。それは言葉で表現できないような孤独と絶望の世界でした。私が最も辛かったのは、見えない・聞こえないということそれ自体よりも、周囲の他者とのコミュニケーションができなくなってしまったということです。私から声を出すことはできました。しかし相手の返事が聞こえず、表情も見えない私には、会話をしようとする意欲さえなくなっていきました。私は高校2年で盲ろう者となったわけですが、その時はそもそも高校を卒業できるかどうかさえわかりませんでした。

彼がどうやってコミュニケーションを取り戻すことができるようになったのか？お母さんと二人で開発した「指点字」というものでした。点字タイプライターは、キーが左右に3本ずつ付いていて、それで点字を打つのだそうです。あるとき台所仕事をしていたお母さんが、手を拭きながら、彼の手に「さとし、わかるか？」とキーボードを打つようにして指を手の甲に押しつけたのだそうです。彼は瞬時に、「わかる！」と答えたそうです。

「ぼくの命は言葉とともにある」（福島智著・致知出版社発行）より

5分で福島智さんのことを語るのは無理でした。（明日の講話へ、つづく）

## 10月17日（火）その84 福島智が絶望の中で見いだしたもの

（その 83 からの続きです。）東京大学教授の福島智さんについてお話しします。彼は3才で右目を、9才で左目を失明。14才で右耳の、18才で左耳の聴力を失いました。彼は絶望の深淵から這い上がり、筑波大学付属盲学校から、1983年に東京都立大学に入学し、その後大学院に進み研究者への道を歩み始めます。都立大学助手、金沢大助教授を経て、2001年から東京大学に勤務。2008年には、東京大学の教授となり、全盲ろう者で世界初の大学教授になった方だそうです。

福島智さんは、どのようにして絶望から抜けだし、生きるエネルギーをもらったのでしょうか。盲学校の一人の友人が福島さんの手のひらに「しさくはきみのためにある」と書いてくれたそうです。「私の過酷な運命を目の当たりにして、彼は『言葉と思索』が生きる道だ」と教えてくれた。光が認識につながり、音が感情につながるとすれば、『言葉』は魂と結びつく働きをするのだと思う。私が幽閉された「暗黒」の真空から私を解放してくれたものが「言葉」であった」と、彼は語っています。

その言葉とは、二種類ありました。一つ目は、「コミュニケーションに用いる言葉」です。「私が絶望から抜け出せたのは、指點字を使って実際に話しかけてくれたり、周囲の人の言葉や周りの様子を伝えてくれたりする「指點字通訳」というサポートをしてくれる人たちが私を助けてくれたからです。私はこの指先で伝えられる言葉の力によって、生きるエネルギーを与えられました。」と述べています。二つ目は、「読書を通しての言葉」でした。3才で右目を失ったため両親がよく本を読んでくれたそうです。目が見える間は、よく読書をしていました。全盲ろう者になった自分に生きる意味はあるのか？その答えを見つけるために、福島さんはむさぼるように読書をし、「思索」し続けました。戦争を題材とした小説五味川純平の「人間の条件」、トルストイの「戦争と平和」、小松左京の「果てしなき流れの果てに」、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」や「杜子春」、立花隆「アポロ13号奇跡の生還」、北方謙三「水滸伝」などです。「極限状態の中で人はどう生きたのか？」福島さんは、生きる意味を探し続けます。

大学生の頃読んだビクトール・フランクルの「夜と霧」は、アウシュビッツ強制収容所の極限状態から生還した作者の実体験に基づき、「生きる意味」を追究した作品です。福島さんは、強い衝撃を受けました。自分は目は見えなくて聞こえないけど、命はある。命があることは、何らかの意味がある。だから自分は生きていてもいいんだと考えるようになります。

「人は苦悩の中で希望を抱くことで、生きる意味を見いだせる。」「人は交わりを伴ったコミュニケーションを行うことで、他者との関係性を産み出し、それによって生きている実感が持てる。」と述べています。

福島さんが盲ろう者になってその体験から学んだ2つのこと

- ①人間はひとりぼっちでは生きていけない。
- ②どのような困難な状況にあっても、可能性がゼロになるということはない。チャレンジし、現状を変革していく可能性は必ずある。と述べています。

沖縄盲学校の濱元教頭のお話で、久しぶりに福島智さんのことを思い出しました。そして2年前に読んだ福島さんの本を読み直してみました。

最後に福島さんが書いた詩を一つ紹介して終わります。

### 指先の宇宙

ぼくが光と音を失ったとき、  
そこには言葉がなかった。  
そして世界がなかった

ぼくは闇と静寂の中でただ一人、  
言葉をなくして座っていた。  
ぼくの指に君の指が触れたとき、  
そこに言葉が生まれた。

言葉は光を放ちメロディーを呼び戻した。  
ぼくが指先を通して君とコミュニケーションするとき、  
そこに新たな宇宙が生まれ、  
僕は再び世界を発見した。

コミュニケーションはぼくの命。  
ぼくの命はいつも言葉とともにある。  
指先の宇宙で紡ぎ出された言葉とともに。

(次のページに「その 85」あり)

## 10月18日（水）その85 GPSのしくみを説明できますか？

今日この後休みをいただいて東京に行ってきます。全日中校長研究大会の70回記念大会に参加するためです。実は私は県の中学校長会会長だったので、周年行事で表彰されるのです。（エヘン！）

旅と言えば今ではスマホの「地図」「現在地情報」などが便利ですね。

先週10月10日に日本版GPS衛星「みちびき」4号機の打ち上げに成功しました。覚えていますか？これまで地球上のどこにいても自分の位置を知ることができるGPS（Global Positioning System）は、アメリカの国防省が管理する衛星からの情報に頼ってきました。しかし最近ではアメリカに頼らずに独自の衛星を打ち上げようとする気運が高まり、ロシア、欧州、中国、インド、日本が独自衛星を打ち上げています。

日本の衛星は、8月の3号機に続きこれで4機目となり、来年春には本格運用が始まるということです。これによって農業・建設機械等の自動運転、それにドローンによる物資の輸送など社会のさまざまな分野で新たなサービスが展開できると、期待されているそうです。

ところで皆さん、「GPSのしくみを簡単に説明しなさい」と言われたら、できますか？・・・エヘン！それでは私が説明しましょう。（笑）

実はGPS衛星は、常に「宇宙における衛星の位置」、「電波を発信した時間」だけを送信しているのです。そのためGPS衛星には正確に時を刻む、一台で1,000万円もするような原子時計が搭載されているそうです。一方受け取る側のスマホやカーナビなどの受信機には、普通の時計が組み込まれているため、誤差が生じるのだそうです。GPSを使った地球上での位置の測定は、実は3つの衛星からの情報で特定できるのですが、誤差の修正のため4つの衛星からの位置情報を使うのだそうです。

- ①一つ目の衛星からの位置情報で、受信機側は、まず自分のいる場所と衛星との距離を測定します。ある点から一定の距離にある点の集合は球です。
- ②次に2つめの衛星との距離を割り出します。これで2点からの距離がわかることになるので、自分のいる場所は2つの球の交わる点の集合になり、それはある円周上の点になります。その円周のどこかにいるわけです。
- ③さらに3つめの衛星からの位置情報で、その衛星との距離が計算できます。①②からわかった円と、3つ目の衛星からの情報で得た新たな球の交わる点は1点または2点だけです。1点目が地球上にあるとしたら、2点目は宇宙空間もしくは地球の内部にあることになります。だから地球上の位置が一点だけ決まるのです。4つめの衛星の情報で誤差修正をするようです。

わかりましたか？まあ、①②③の意味がわからなくても、GPSを使うことはできますので、安心して下さい。（笑）

大昔は、太陽や北極星を頼りに方向を知ることができました。でも自分の地球上の位置を正確に知ることはできませんでした。そもそも地球が丸いということすら知らなかったのです。その後地球が丸いことがわかり、「その38一秒を正確に計る技術」で書いたように、荒れた海でも正確に時を刻む時計の発明によって、人間は海上でも自分の位置を知ることができるようになりました。そして現在では、宇宙の新たな星（GPS衛星）と原子時計を活用して、誰でも地球上の自分のいる位置を知ることができるようになったのです。